

# 教 仏 庵 草

第187号  
(発行日)

2006年1月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail---kousien2720kimyou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○真宗共学会――毎月第一と  
第三木曜日午後7時より。

\*8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます

## 真宗問答⑱ 寿命無量の願

○「阿弥陀仏とはどういう仏様  
でしょうか」

D「平生、私たちが仏様を拝む  
場合、多くの人はめいめいが思  
いえがいた仏を拝んでいるよう  
に思います。要するに、自分の  
勝手に想像している仏、自分と  
って都合のよい仏、はつきり言  
えば自分がでっちあげた仏を拝  
んでいるにすぎません」

○「具体的にはどういう仏を私  
たちは拝んでいるのでしょうか」  
D「真宗門徒のお内仏（仏壇）  
の中心は阿弥陀仏（南無阿弥陀  
仏）です。しかしながら私たち  
はお内仏にお参りする時、とも  
すると先祖ばかりを仏として拝  
んでいます。それではまことの  
仏を拝んだことになりません。  
また（どうか一日無事でありま  
すように）とか（悪い病気になる  
りませんように）とか（商売が  
うまくいきますように）という  
ような自分の都合のよい願いを  
かけ、それをかなえてもらおう  
として拝んだりします。それは  
阿弥陀仏を拝んでいるのではな  
くて、仏をあたかも守護神や守  
護霊であるかのように、お守り  
として拝んでいます。あるいは

真宗門徒は仏にお願いごとをし  
てはいけないと聞いて、何も思  
わないでただ手を合わせるだけ  
でよいというような、（仏は何か  
わからないがありがたいもの）  
という漠然とした敬虔感情での  
み拝んでいます」

○「仏様（阿弥陀様）とはどう  
いうお方をどうしたら知るこ  
とができるのでしょうか」

D「釈尊が『仏説無量寿経』（大  
経）に阿弥陀仏の願いを説かれ、  
その願いを實現しておられるの  
が阿弥陀仏であると教えてくだ  
さいます。だから阿弥陀仏とは  
どういう仏様であるかを知ろう  
と思えば阿弥陀仏の願いの内容  
をお聞かせ頂くことによつて、  
凡夫であつても阿弥陀仏のお心  
にふれることができます。『大経』  
には阿弥陀仏の願いは四十八通  
りの願いとして説かれており、  
これらの中でことに私たちにと  
つて大事な願を拾つてこれまで  
読んでまいりました」  
○「先月は、第十二願の光明無  
量の願についてお話していただ  
きましたので、今回は第十三願  
についてお話しください」  
D「第十三願は寿命無量の願と

## 謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

平成十八年元旦

土井紀明 土井眞由実  
山下清人 中村憲二  
迫田忠夫 中村穂積

いわれています。『大経』には  
たとい我仏を得たらんに、寿命  
よく限量ありて、下百千億那由  
他の劫に至らば、正覚を取らじ  
とあります。現代語訳では

（わたしが仏になるとき、寿命  
に限りがあつて、はかり知れな  
い遠い未来にでも尽きることが  
あるようなら、わたしは決して  
さとりを開きません）  
となつています」

○「法蔵菩薩様はこの願を建て、  
これを成就して寿命無量の阿弥  
陀仏に成られたと大経に説かれ  
ているのですね。そうすると阿  
弥陀仏の寿命は無量であるとい  
うことですね」  
D「ええそうです」

○「なぜ法蔵菩薩様は無量の寿  
命すなわちはかりなきいのちの  
仏になりたいと願われたのでし  
ょうか」  
D「法蔵菩薩は生きとし生ける  
ものを救済するという願いを実  
現して十方衆生を救う無上仏に  
なられました。それが阿弥陀仏  
です。しかし、もし阿弥陀仏の  
寿命に限りがあれば、二〇〇〇

年前の衆生は救われても、それ  
から一〇〇〇年たつて阿弥陀仏  
の寿命が尽きてしまったなら、  
一〇〇〇年以後の衆生は救われ  
ないこととなります。親鸞聖人  
の時代は衆生は救われても現代  
の私たちは救われないことにな  
りかねません。また現代の衆生  
が救われても、阿弥陀仏の寿命  
に限界があれば、未来に阿弥陀  
仏はおられなくなつてしまい、  
未来の衆生は救われません。そ  
れゆえ、法蔵菩薩は寿命の無量  
を願われました。それはご自身  
のためではなく、一切衆生を一  
人ものこさずに救いたいとい  
うかぎりない慈悲のお心からでた  
願いです」

○「なるほど、寿命が無量なれ  
ばこそ、どの時代の衆生も救わ  
れるのですね」  
D「そうなんです。阿弥陀仏の  
寿命が無量であることは一切衆  
生を救うという大悲の仏の本質  
的なお徳です。それを別な方面  
から言えば、大悲は無量なるゆ  
えに仏の寿命が無量であるとも  
いえます」

\*

○「大悲がかぎりなきゆえ仏の寿命が無量であるというのほどうしてですか」

D「仏のさとり智慧は自他一如の智慧です。私たち凡夫の知恵は自分と自分以外の他者を受けへだてをする知恵です。仏の智慧は他者を見ること自己の如しといわれるように、他の一切衆生の上に自己を見、一切衆生を我が子のごとくに見る智慧であります。凡夫でも親子ですと、親は子どもの苦しみや悲しみに共感し、子どもの苦しきは親の苦しみと感じ、子どもの喜びは親もともに喜ぶという親子一体の情というものがありません。ただそれはごくせまい親子や夫婦の間にはありえても、他人となるともう冷たいものです。自分たちだけの間では愛するが、他者にはとかく無関心です。凡夫の知恵はそんなものですが、仏の智慧は自と他をわけへだてしない。一切衆生を自己のごとくに感じ、それゆえ衆生の苦しみに共感してこれを除こうと慈愛したまうのであります。これが仏の大悲の智慧であります」

○「世界に大悲の智慧が働いているというのは本当に不思議であり、ありがたいですね」  
D「そうなんです。この大悲の智慧こそ、世界の真実で、これがなければ、この世界は暗黒であり、無意味であり、虚無でしかありません」

\*

○「大悲の智慧の働きがあるから、仏のいのちは無量であるというのはいか」

D「阿弥陀仏の大悲は衆生を漏らすことなくよりよい、逃げるものをも追いかけて、一人も残すところなく衆生を救わずにはおかないという願心です。ところが救われねばならない衆生は尽きることはありません。群萌といわれるほど次々に生まれてまいります。衆生が尽きることはなれば、一人も漏らすことなく救うという阿弥陀の大悲の寿命にまた尽きる時はありません。そこで阿弥陀仏は無量無量なるゆえに寿命も無量なのです」

○「先ほどは、阿弥陀仏の寿命無量によって阿弥陀仏の無量の徳がいつまでも働き続けてくださるとのことでしたね」  
D「ええそうです。(寿命)とはものの性質を保持する働きのことです。私の(寿命)とは私という人間の性質を保持する働きです。私の寿命がなくなるとは、私としての人間の性質が働かなくなるということです。それは死ぬというところで、死ねば私という人間の働きができなくなることで、見ることも聞くことも考えることも書くことも話すこともできなくなります。物の場合でも、たとえば蛍光灯の寿命が尽きたということは、蛍光灯という性質、すなわち場所を照らす働きがなくなったということでは、寿命があるというのとは場

所を照らす働きをし続けていることです。バラの花の寿命があるというものは、バラとしての香りや美しい色があることで、花の寿命が尽きたとはバラの花の美しい色も良い香りもしなくなつたということですね。そのように寿命とはそのものの性能を保持する働きです。阿弥陀仏の寿命によって阿弥陀仏の衆生救済の性質が保たれ持続していることです」

○「寿命とかいのちというのはそういう意味なのですか」  
D「なお、阿弥陀仏の寿命について、法然聖人のお言葉に、**すべて仏の功徳を論ずるに、能持・所持の二の義あり。寿命をもて能持といひ、自余のもろもろの功徳おぼことごとく所持といふなり。寿命はよくもろもろの功徳をたもつ、一切の万徳みなことごとく寿命にたもたる、がゆへなり。**(『西方指南鈔』)とあります。(能持)という寿命の定義は、阿弥陀仏についてだけなく他の諸物の(いのち)の場合にも同じ意味があると思えます」

○「能持というのはどういう意味ですか」  
D「能は能動を表します。持はたもつ、保持する、維持する、という意味でしょう。能持ですからたもつ側、保持する側、維持せしめる側のことです。逆に所持はたもたれる側、保持される側、維持せしめられる側のこととです。ですから仏のよき性質(功徳)を保つのが能持としての寿命です。能持としての寿命が無量ということは、阿弥陀仏の功徳がどこまでもかぎりなく働き続けられることを意味しています」

\*

\*

○「阿弥陀仏の無量寿のいのちに私たちが摂め取られると、私たちのいのちはどうなるのですか」

D「阿弥陀という無限者に摂取されると阿弥陀仏と一つになるゆえ、私たちも無量な寿命をいただくといわれています。『大経』には、**浄土に生まれたものには、自然虚無の身、無極の体を受けたり**(『極長生を獲べし』)と説かれ、『阿弥陀経』には**人民も、無量無辺阿僧祇劫なり**と説かれて、阿弥陀仏の寿命も無量無辺なら浄土に生まれたもの(人民)も寿命が無量無辺であると説かれています。そういう身はもはや私たちの考えているような個物としての形ではな

くて、虚無の身すなわち形なき身といわれています」

○「形なき無限定な身になる、だからもはや死はないのですか」  
D「そういわれています。私たちは浄土に生まれ、死なないのちを生きる(極長生)ものになるのであるといわれ、そのゆえに大いなる希望をもつて生きることができるようになります。こういふ大いなる希望に満ちた約束の背景に、衆生を摂取する阿弥陀仏ご自身が、寿命無量を成就したいという誓願(第十三願)の成就があるのです」

○「阿弥陀仏が寿命無量であることを聞きすることは、それによって私たちの、浄土に生まれるという願いがより強くなるのですか」  
D「ええそうです」

(了)

### 平成18年度御年忌年回表

1	周忌	平成17年	亡
3	回忌	平成16年	亡
7	回忌	平成12年	亡
13	回忌	平成6年	亡
17	回忌	平成2年	亡
23	回忌	昭和59年	亡
27	回忌	昭和55年	亡
33	回忌	昭和49年	亡
37	回忌	昭和45年	亡
50	回忌	昭和32年	亡

(23回忌と27回忌をせず、25回忌にする数は50年ごとになります)

# 歎異抄

## 後序第七講

されば、かたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが、身の罪悪のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり。

(歎異抄後序より)

### 現代語訳

(そうしてみると、もったいないことに、親鸞聖人がご自身のこととしてお話になつたのは、わたしどもが、自分の罪悪がどれほど深く重いものかも知らず、如来のご恩がどれほど高く尊いものかも知らずに、迷いの世界に沈んでいるのを気づかせるためであつたのです)

\*

この一節は、親鸞聖人がつねづね「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と仰せになつたことは、私たちがどれほど罪悪が深い身であるか、またそういう我が身を助けようとご苦労くださった阿弥陀如来様のご恩がどれほど深重であるか、それを私たちに気づかせてくださるためであつた、と唯円房は聖人のこの仰せを聞かせていただく中に感じられたのです。親鸞聖人がご自分のことに仰せくださるお言葉を取っておられるのです。おそらくこの聖人の仰せは、聖人が他者に言つて聞かせてやろうというような意図で語られた言葉ではなかつたのでありましょう。しみ

じみと如来の恩徳の重いことを自身の上に感じられて、その感じられたままを語られたのでありましょう。

\*

弥陀のご恩の深いことを聞いては、それほどの大悲のご恩によらねば助からない我が身の罪悪の深さを知らされ、また我が身の罪の重いことを感じるにつけても、この罪業の身を助けようと立ち上がって願を起し行を積んでくださった如来のご恩の深いことを知らせて頂く。自身の罪の深さと如来のご恩の深さは合わせ鏡のようにお互いを照らし出しているのです。

「身の罪悪のふかき」ことは阿弥陀仏が知り抜き給い、その知られた罪業の身を浄化して仏身にしてくださる、それはひとえに阿弥陀仏の永劫修行のたまものであります。この修行の結果を南無阿弥陀仏として私たちに与え、私どもの罪をすべて除いて浄土へ生まれさせてくださる、それが南無阿弥陀仏のお徳です。

\*

ここには「身の罪悪のふかき」と仰せられています。我らが身は罪悪の身だとの仰せです。『和讃』にも

煩惱具足と信知して

本願力に乗ずれば

すなわち穢身すてはてて

法性常楽証せしむ

とあり、聖人は我らが身を穢身と仰せられています。穢身とは罪の身、煩惱の身ということ。『仏説無量寿経』には

迷いの衆生の身体について

生身・煩惱の二つの余(因果)、ともに尽くせり

と説かれ、浄土に生まれた菩薩は生身も煩惱もともに消滅すると、釈尊はお説き

なっています。「生身・煩惱」というのは煩惱は因、生身はその果という意味です。無明・煩惱を因とし、その結果として生身と受けたというのが仏教の身体の見方です。だから身体を受けたということは煩惱があるということ、罪があるということの徴なのです。

煩惱と身体因果は十二因縁として語られますが、それを簡単に述べますと、無明(無知)から愛(愛欲・愛執)が起り、愛は生存(有・生)を取って、その結果身体をもって生まれる。それゆえ身体として生まれ来たった根本原因は無明・煩惱(欲愛・罪)であるといわれています。「罪の身」とか「煩惱具足の身」とか「穢身」とかいうのはこういういわれからです。まさに「ナマ(生)身」は煩惱が形をとつたものです。それが証拠に凡夫の身体は「どこまでも生きようとする底知れぬほど深い執着」を内にもち、外には「食わねばならぬ身」であり「性愛の身」として現実化しています。

これを縁としてどれほど多くの煩惱が起り、どれほど多くの悪が起るのか。この世の犯罪は我らが身体と実に深い関係があります。身体あるゆえに、いかに浅ましい生活を余儀なくされるか。一片の肉を食うのも、あるいは食わねばならぬことも、また我が身と家族の身を養うために稼がねばならぬことも、身体を持つてゆえであります。そのためにどれほど煩惱を起すのであろうか、まことにこの生身あるゆえであります。

\*

ところが最近、「この身のいのちは尊い」とか「尊いいのち」ということが、真宗の法話の中で当然のごとく語られ、「尊いいのちに目覚めましょう」とまで

いわれます。「われらのいのちは尊い」ということが、(衆生のいのちの本質は仏の御いのちなり)というような高いレベルの話でいわれるのなら、その通りでありましょうが、こういう高いレベルの話も聞いても愚かな凡夫はその深い意味がわかりません。そうすると「いのち」という話を聞けば、まずは(肉体のいのち)のことしか思い及びません。そうすると「二度とない尊いいのちを大切に」という話は、この肉体を大事にする、健康に気をつけて死なないようにする程度の話になってしまい、肉体のいのちを引き延ばすことに精を出すことになりましてしまいます。しかも、「大事ないのち」は凡夫にとっては自分のいのちあるいは家族のいのちの場合であって、他者のいのちの尊いことには実感がありません。だとすると「尊いいのち」という話は凡夫にとって、ややもすれば「私の肉体的ないのちへの執着」をさらに強めてしまっただけになってしまわないかという疑問を感じるのであります。

もし真宗の法話でこの身のいのちが尊いというなら、如来法蔵様の本願のかけられて「被本願の身」という意味で尊いといわねばなりません。我が身のいのちは阿弥陀仏の本願の働く場所として尊いといえます。しかし、弥陀の本願を抜きにして「この身のいのち尊し」とだけいわれるなら、我ら凡夫においては「尊い肉体だから大事にしよう、死なないうにしよう」という「いのちを惜しむ」話でしか受けとれません。しかしながら宗祖にも法然聖人にもいな釈尊にも、「このままの肉体のいのちが尊い」というような言葉はないのです。(了)

## 【初めてのインド5】

私たちは画家の秋野不矩さんと別れ、プリーに来たが、プリーは海辺にある美しい街で、ヒンズー教の聖地として有名な地である。それはこの地にジャガナート寺院というシャンカラが住した寺があるからでもある。シャンカラはベータンタ派の開祖といわれ、インド哲学史上もつとも有名な思想家の一人である。8世紀に生まれ、32歳で亡くなった天才である。仏教がインドで衰退した一因は彼の仏教批判によるといわれるほどのヒンズー教の論客であった。ジャガナート寺院はヒンズー教徒以外は入れない。門前に監視者が立っていて異教徒は排除される。インドを案内してくれていた原さんから「ジャガナート寺院になんとしても入ってみたい、一緒に行かないか」と誘われた。行こうということになり、インド人の服装をして入ることになった。インドの男性が着ているドーティを腰に巻き付け、顔をできるだけかくして、ドキドキしながら監視人の横を通っていったが尋問されずに入ることができた。目ざす神殿に入ると中は狭く薄暗い。油が染みついた灯明がたくさん灯され、参拝者が押しかけている。祭壇の正面に幕が下ろされていて主神は見えない。しばらくじつと立っていると、係の少年がサツとその幕を引き上げる。すると神というよりも「なまはげ」のような姿をした(神)が表れた。参詣者たちはドツと歓声を上げてこの神に礼拝を繰り返す。目は大きく舌をペロリと出した神で、身に寶石をまとうている。するとまた幕が下がって見えなくなった。なんとも奇妙な光景である。端正な仏像を拝んできた私はこういう神を拝む気にはなれなかった。とにかく見るべきものは見たので帰ろうとすると、近くのインド人から異教徒とあやしまれ尋ねられた。私はヒンズー語はわからなかったが、4年もインドにいる原さんがヒンズー語で適当に即答し、逃げ去るようにその場を離れて寺の外に出た。緊張しっぱなしの参入であ

った。宿泊したミッションでの食事にカレー煮の魚が出た。南インドのミッションでは全くの肉食だった。「あれあれ」と思ったが、ラマクリシユナミッションでは肉食は必ずしも禁止されてなかったのである。それにプリーは海に面しているから豊富に魚が捕れるのである。ミッションを去るとき、内垣先生が、一緒に旅をともししてきた先生の甥を(ここでしばらく修行をするように)とミッションに預かってもらうことになった。その甥というのは日本で交通事故を起こして老女をはねてしまい、甥の親が彼の根性をたたき直して欲しいと先生に托したのである。彼はプリーにおいていかれるのがいやで涙ながらに「おいていかないで一緒に日本に連れて帰ってくれ」と先生に懇願したが、聞いてもらえずおいておかれることになった。私はここにおれる彼がむしろうらやましかった。プリーからまた汽車に乗り、夜カルカッタのハウラー駅に着いた。構内は多くの人々が座り込んで足の踏み場もないほどだった。近くのハウラー橋は夜にもかかわらず人の行列で混雑していた。しかも男性ばかりで、異様な雰囲気であった。当時のインド・パキスタン戦争の影響があったのかもしれないが、カルカッタほど人の多いところは初めてで人混みに圧倒されてしまった。私たちはタクシーでベルールマートにあるラマクリシユナミッションの本部に行き、ゲストハウスに泊めてもらった。次の日の朝食後ラーマクリシユナ教団の管長様に面会する。教団の頭首にお会いできるのは幸運ということであった。管長様はご高齢で痩せておられイスに座られたままだった。その後この修行僧がガンジス河の対岸にあるダクシネスワールのドッキネツヨル寺院に案内してくれることになった。ミッションはガンジス河に面してここから小さなボートに乗り込んだ。天気がよくて空が青く、そよ風が吹いて実にさわやかであった。河幅は広いので四十分ほどかかって対岸の船着き場に着いた。(続)